

の で、ほとんどう頭が膝につきそうなくらい俯
上 体を起こした。まだ頭がクラクラしていた
た。何分かに、どうにか体を立て直した、
の ベンチに倒れこんだ。目の前が真っ暗だっ
呼 吸も荒く、よろけるようにして、ホーム
押 しのけて、ホームに転がり出した。
瞬 間、彩葉は前にいた乗客たちを言葉もなく
慢 できないほど具合が悪くなってきた。
く ； ； と 思 っ た が 、 冷 や 汗 が 出 て き て 、 我
十 五 分 ほ ど 乗 っ て い れ ば 職 場 の 最 寄 駅 に 着
す ん で き て 、 「 貧 血 か も 」 と 思 っ た 。
て いた ら 、 次 第 に 頭 痛 が し て き た 。 視 界 が か
な い 。 彩 葉 は 息 苦 し さ を 感 じ て い た 。 我 慢 し
女 性 の 香 水 の 匂 い が き つ か っ た せ い か も し れ
ず な の に ； ； 。
そ ん な ふ う に 気 合 を 入 れ て 家 を 出 て き た は
て いる 。

に た う い 座 じ と ー の は な と 菜 っ
。 。 と な も そ っ も の て 心 気 か 誰 ない ジ 彩 ところ の 隣 え て
張 り 詰 め て いた 糸 が ぶ つ ん と 切 れ た よ う
も 安 心 し て 、 涙 が あ ふ れ そ う な っ
ち にな れ る こと は な かつ た 。
い っ ぱ い にな った 。 最近 、 こん な ふう
思 っ た 途 端 、 彩 菜 の 心 の 中 は あ た た か
た の 思 っ た 。 思 っ た 。 な ん て 穏 や かな 感
し て こ の 人 は 、 ず っ と わ た し の 横 に
か し ら 。 、 こ の 人 は 。 ど う し て こ こ に いる
よ く な り ま し た ？
ト 姿 。 サ ラ リー マ ン と い う 感 じ で
同 じ 年 ぐ ら い だ ろ う か 。 カ ジ ュ ア ル
。 腰 掛 け て いた 。 一 人 分 の 席 を あ け た
。 思 い な が ら 、 声 の 主 を 見 た 。 彼 は 彩

「大丈夫ですか？」
なにもこたえない彩葉に、その人はもう一度聞いた。
「駅員さん、呼んできませんか？」
彩葉は涙を隠すために顔を伏せながら、首を振った。
しばらく沈黙があつてから、
「何か飲みますか？」
彼は言った。
「そこに販売機があるから、何か買ってきましょうか」
「いえ、大丈夫、大丈夫です」
彩葉が俯いたままこたえようと、
「そうですか」
と彼は爽やかに言い、
「もう少し休んでいた方がいいかもしれません」
と続けた。
と顔を上げて、彩葉は彼の言葉に従い、ゆっくり二人が腰掛けたベンチから線路沿いの木々

「桜の季節は短いから。でも俺、こういう緑
だ。なと思っただ。ふうに桜の花を眺める彼の心の持ち方が素敵
お花見もあるのか、と野菜は思った。そんな
咲き誇る桜を眺めていた。」「
花見には行かなかったけど、毎日歩きな
「いいえ、あなたは何？」「
「が。問いかけてきた。」「
「お花見、行きました？」「
名所を訪ねていたことを思い出した。一緒に桜の
去。年まではこの季節には恋人と一緒に桜の
彩。菜はぼんやりと思った。
：。そういえばお花見も行かなかったなあ。
た。木々は花のそれを緑の葉の衣装に変えてい
が見えた。いつのまにか桜の季節は終わっていた。

「あ、あの、ここでこんなふうにして……」
「彼は新緑から目を離さない。」
「え？」
「の、失言だったかもと思った。」
「あの……お仕事とか、いいんですか？」
「前髪が揺れていた。」
「に、彩葉は考えながら、隣の彼を見る。春の風を感じていたのね。」
「たし。意識よりも身体の方がちゃんと季節をたてもそういえば花粉症もつくに始まっていて。」
「そんな季節の移ろいを感じる余裕さえ失っづかないうちに季節は流れていたんだ。」
「中で季節は冬のまま止まっていた。だけど気前の会社が倒産した頃は冬だった。彩葉の前春なんだ、とあらためて思った。」
「相槌を打ちながら彩葉は新緑に目を細めた。」
「そう……ですね。」
「を眺めているのも好きですよ。」

「時間は大丈夫なんですか？」
彼は彩菜を見て、にこっと笑った。
「少しくらいなら大丈夫。そちらこそ大丈夫
ドキッとするほど優しい笑顔だった。
夫？」
「：：少しくらいなら」
彼はもう一度にこっと笑って、また新緑の
方に視線を戻した。
彩菜も彼から視線をはずした。ドキドキし
ていた。どうしたんだろう、わたし：：。
「あの：：」
「かけた。」「
「あの、すみません、わたしのために、とい
うか、わたしのせい、ここで時間を使うこ
とになっちゃったんですよね」
「い、て、上手く台詞がまとまらなかったが、動揺して
「う、ん、まあ：：。」「
「と一旦言葉を切って、彩菜を見る。気分悪
「な、んだかほっとけなかつたんです。気分悪

た名刺を顔の前に近づけてまじまじと見つめ
た。会社名と住所、電話番号、名前が印刷さ
れた名刺を何気なく裏返してみた。そして目
に飛び込んできた文字に釘付けになる。
そこにはアルファベットで Y U Y A K I
S H I M O T O とあり、その下に携帯電話番
号と携帯メールアドレスが記されていた。
ら、名刺を胸に抱きしめてっこりと笑っ
た。
「藤崎彩菜といます。さきほど駅のホーム
ではありがとうございました。さきほど頂いた名刺
にアドレスがあつたので、メールしてしまい
ました。」「
「どういたしまして。俺は別に何もして
ないけど。もう大丈夫ですか？会社には
間に合いましたか？」
「連絡なしで遅刻してしまい、ちよつと怒ら
れました。体調の方は大丈夫です。」「
「お大事に。あまりムリはしないで。俺はこ

「れからまた外回りです。」
「いってらっしゃい^^」
遅刻をして、メールチェックのために頻繁
に席をたつ彩菜を、恵美子是不審そうな顔で
見ていた。
いつもの彩菜なら、その視線が気になって
仕方がないのだが、今日の彩菜はまるで気に
ならなかった。
うに帰っていった。
定時の十七時になり、恵美子はいつものよ
うに仕事も手につかず、一人でボートしなが
ら携帯電話を手にして眺めていると、思いが
けずメールが入った。
「ドキッとしながら、慌ててチェックする。」
裕弥からだった。
「外回りから帰ってきました。歩いていたら
満開になっている遅咲きの桜の木を見つけま
した。さっきの駅のホームの裏側の公園で

「そうですね！ 見に行ってみますね」
メールの返信をしてから彩菜は考える。
ホームの裏側の公園：、わかるかな。桜
はすぐに散ってしまいうから早く見にいかない
と。
彩菜はその日、会社を出た後、朝、途中下車した駅で降りた。いつもより少し早めに退社できたが、二十一時はまわっていた。
改札を出て、ホームから見えていた風景と反対の方向に歩いた。
目指すものはすぐに見つかった。
そこが公園だと気づくより先に、桜が目にとまった。一本だけ、大きな桜の木が花を満開にさせている。
彩菜はその木に近付いていった。桜の木の向こうの夜空に満月が見えた。
なんて見事な光景だろう。
彩菜は思わず足を止め、目の前の絵に描いたような光景に見とれた。
目の前の絵に描いた。

とこたえた。
「す
んです。残業で：：。今日は早いくらいで
「ええ。毎日このくらいの間になっちゃう
「彩菜はこくと頷いてから、
「こんな時間まで仕事？」
裕弥は言っただけ、言葉を続けた。
「驚いた」
そこにいたのは裕弥だった。
と、二人は同時に声を発した。
「あ」
いく彩菜に気づいて、彩菜を見た。
た。桜の木の方こう側にいた人も、近付いて
彩菜は少しずつ、桜の木に近づいていっ
あれ？もしかして：：。
げるようにたたずんでいた。
木の向こうに人がいた。やはりその桜を見上
花に気をとられて、気づかなかった。桜の
あ。
舞った。
ざあ：：と、風が吹いて、桜の花びらが

「大変だね。お疲れさま」
暗くて表情はよく見えなかったが、その口
調はとても優しかった。
「メールもらって、絶対見にこようと思った
の」
「ね、すごいでしょ。これ一本だけ咲いてた
から。今年、桜を見てないって言ってたか
ら、これはぜひ報告しなくちゃって思って」
「ありがとうございますごさいます」
そんなふうに思ってくれた裕弥の気持ち
嬉しかった。
また風が吹いて、桜の花びらが舞った。
「ああ、こんなに花びらが散ったら、花がな
くなっちゃうね」
「今夜見に来てよかった。明日になったら、
もう散ってたかも」
「うーん、そうかも」
二人はどちらからともなく、顔を見合わせ
て、小さく笑い声をたてた。
「メシ、食べた？」

事
は
久
し
ぶ
り
だ
っ
た
。
　　う
ち
に
帰
る
と
母
親
が
居
間
か
ら
顔
を
出
し
、
「お
帰
り
な
さ
い
」
と
言
っ
た
。
「毎
日
遅
く
ま
で
ご
苦
労
さ
ま
」
と
言
葉
を
添
え
る
。
「今
日
は
軽
く
食
べ
て
き
た
か
ら
、
食
事
は
い
い
や
」
彩
菜
が
言
う
と
、
「そ
う
。
忙
し
そ
う
だ
け
ど
体
調
気
を
つ
け
な
さ
い
よ
」
と
母
親
ら
し
い
一
言
を
か
け
た
。
「お
風
呂
入
っ
て
、
寝
る
ね
」
彩
菜
は
言
っ
て
、
自
分
の
部
屋
が
あ
る
二
階
へ
の
階
段
を
上
っ
て
い
っ
た
。
　　く
夏
　　く
　　に
つ
づ
く